



だより



R8.5.12 Vol.6

可愛いです

2年生担任の木村先生が、運動会に向けて低学年のダンス指導をしていました。いつまでも若々しい軽やかなステップに、「腰痛で動けなくなっている場合ではないぞ！」と自分自身に喝を入れました。

さてその指導を受けている低学年の子供たち。動いているだけで可愛い。いざダンスの曲と一緒に踊り始めるともう胸キュン(死語?)レベルで可愛さ爆発。(笑)右と左を間違っているけどそれも可愛い!!

ちょうどその日の全校体育。リレー選手の選考をしていました。子供って、いつ頃から走って動作ができるようになるんだろう。一生懸命走る姿を見ながら、ふとそんなことを思いました。

あざとさがいいですね。ひたすらに走っている、懸命に踊っている。そのまっすぐな姿に心が動くんだろうなと思います。運動会、お楽しみに!

返信ありがとうございます

早速、校長室だよりの返信をいただきました。ありがとうございます。「次週も楽しみにしています。」「子供たちの元気な登校姿、安心します。」等々。「ここをこうしてほしい!」等の内容でも全然かまいません。やれること、やれないことは当然ありますが、まずは一緒に考えるきっかけを作ることが始まりです。一緒に楽しい松蔭小にしていきたいと思います。

そして返信をいただくとうれしいんですね。読んでいただいているという実感が増しますから。大人でもうれしいのですから、子供たちはなおさらです。高学年になるとうわべだけの言葉は見抜きます。一言でいいんです。

「よかったよ!」「がんばったね!」そんな気持ちを言葉にしてしっかり伝えてやってほしいと思います。

ありがとう
ございました

四方山話松蔭 ver. 其の六(褒める?叱る?)

もう少しAIにまつわる話を…基本、すごく褒めてくれる生成AI、気分はいいし、否定されない安心感もあります。こんな風に人と接することができたら、どれだけ人間関係が円滑になるだろうとも思います。しかし、ふと考えました。もし相手が、自分の学校の子供だったら?担任している子供だったら?あるいは我が子だったら?

先日、ある会合でこんな話を聞きました。「ある国の調査で、集中を持続できる時間が10秒しか続かない大人が2割近くいるという結果が出た。それを知った大手企業は“10秒で理解させるCM”(だったと思うのですが…)の制作を命じた。…逆じゃないか?」まったく同感でした。10秒しか続かないのなら、それ以上続く力を育てる過程こそが教育ではないのか。

『褒めバイアス』をなくしたAIは厳しい指摘をしてくれます。凹みますが、的は射っている。褒めてばかりのAIにはなかった視点です。そこに成長の伸びしろがあると思うのです。

最近読んだ「そしてだれもゆとらなくなった」というエッセイでは、ゆとり世代の作者が「ゆとり世代なんですよ〜」と笑って言えた時代が過ぎ、今や「だからって…何?」と冷たく見返されるだけとなった…そんなことを書いています。ゆとり世代、さとり世代、Z世代、α…。こうしたラベルにはどこか皮肉が滲みます。さらにSNS全盛の今、誰もが評論家気取りで他人を中傷できる環境が整い、叱った側だけが切り取られる、そんなことも起こります。その空気のせいかな大人が“叱ること”に臆病になっているようにも感じます。もちろん子供一人ひとりの性格や特性に応じた関わりが大切です。しかし褒めるだけでは届かない部分もある。叱るだけでも育たない。AIの褒めバイアスが考えさせてくれたのは、「心地よさ」と「成長の痛み」の両方があるって人は成長するということでした。褒める優しさとは伸ばすための厳しさ、その両方を子供たちに手渡せる大人でありたいですね。

----- 切り取り線 -----

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思っています。